

## 和歌山県北部におけるアスペクト表現「チャウ」について

村中淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

### On the Aspestual Form *-chau* in the Northern Area of Wakayama Prefecture

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

*Key Words: Aspectual Expressions, Japanese Liquid Consonants, Consonant Deletion, Verbal Inflectional Morphology, Kansai Dialect*

#### 要旨

和歌山県北部におけるアスペクト表現「チャウ」の出現と成り立ち、および位置づけについて考察した。「チャウ」は、和歌山県方言に関する先行研究の中にわずかに現れる語形で、それを主な対象として扱った研究は無い。本稿では、面接聞き取り調査からチャウの出現を確認した上で、先行研究を検討し、チャウ・チャル・チャールの形式の、地理的分布・年代的分布・話者の併用形の3点からみて、チャウはチャールから生じたのではないかと推論した。チャウの発生要因については、ラ行子音を含まない活用形の使用頻度の高さから起きた類推、および、ラ行子音の脱落のしやすさ、の2点からと解釈した。標準語から遠ざかる方向への形態変化で、和歌山県北部の有田郡・海草郡近辺から、那賀郡・和歌山市近辺に向けて広がったものかと推測される。

#### 1 はじめに

和歌山県有田市に「漁師さんがやっチャウ店 みかん大王」という居酒屋がある。この「漁師さんがやっチャウ」の意味は、「漁師さんがやってしまう」ではなく「漁師さんがやっている (= 漁師が営んでいる)」だという。つまり、チャウは、標準語テイルに相当するアスペクト表現として和歌山県に存在しているらしいのである。結論を先取りして言えば、このチャウは和歌山県北部における比較的新しい方言ではないかと思われる。本稿では、和歌山方言チャウの出現と成り立ち、および位置づけについて考察する。

## 2 先行研究における和歌山方言のアスペクトの語形

和歌山方言に関する主な先行研究の調査結果から、アスペクトに関する部分を取り出し、表1にまとめた(動詞部分は省略した)。これらの先行研究においては、地域ごとに分けて語形が記述されているが、表1においては、和歌山県内のアスペクト語形の網羅的な列挙が目的であるため、地域ごとに分けずに示した。おおよそ調査年の順に並べている。

表1 和歌山県方言に関する先行研究におけるアスペクトの語形

文献名	内容・地域	調査年	被調査者	進行態	結果態
『方言文法 全国地図』 第4集 <sup>1</sup>	和歌山県内は 13地点	1979 -82	老年層	ヨル・ヤル・オル・イル・ ヤル・テル・テイル・ト ル	テアル・タール・タル・ト ル・テル・チャラ・チャー ラ・チャール・テシモタ
徳川・真田 (1986)	紀ノ川流域 26 地点(県北部)	1984	若・老年 層	テル・トル	テアル・チャール
徳川・真田 (1988)	田辺市と龍神 村(県中部)	1985	若・老年 層	ヨル・ヤル・タール・ト ル・テル	タール・トル・テル
井上 (1998)	紀伊半島海岸 部 42地点(県 北・中・南部)	1983 -88	70歳前後	アル・イル・オル・ヨル・ ヤル・テイル・テル・ト ル・テアル・タール・チ ャール・チャル	テイル・テル・テアル・テ ヤル・トル・タル・タール・ チャール・チャル
岸江・中井 (1999) <sup>2</sup>	和歌山は 県北部5地点	1992 -96	10~70代	テル・トル・タール・テ ラ・テカル	テル・タール・ターラ・ チャール・トー・タ
岸江 (2013)	和歌山は 県南部8地点	2002 <sup>3</sup>	若・青・ 壮・老年	ヤール・ヤル・イル・テ ル・トル	タール・テル・テオル・ト ル・ターッタ・ヤル
佐藤 (2009)	県南部の4町	2008	若・中・ 老年層	ヤル・アル・ヤール・ヨ ル・トル・タール	タール・タル・トル
岸江 (2013)	和歌山は 県北・中・南部	2010 <sup>4</sup>	60歳以上	ヤル・アル・ヨル・テル・ トル・タ(ー)ル・チャ (ー)ル	テル・トル・テアル・ タ(ー)ル・チャ(ー)ル

進行態・結果態ともに、多くの語形がみられる。村内(1962)によれば、元来は助詞「テ」の有無によって対応をなし、「継続態(進行態)はヤル・ヨル、結果態はタール・チャール・トール・トル」と整理できるとのことである。しかし表1から、結果態はほぼ全てテ形列の語形であるが、進行・継続態にまでテ形列の語形が入り込んでいることがわかる。

これらの語形の最終拍をみると、ほとんどがルもしくはラである。ラは、ルの直後に文末助詞ワがついて融合した結果生じたと考え、最終拍はルに集約される。チャウのように最終拍がウになる語形は見当たらない<sup>5 6</sup>。

また、チャウと共通の、語頭にチャ音を有する語形（チャル、チャール）に注目すると、和歌山県北部の調査結果にはあるが、中部・南部には、進行態・結果態とも現れていないようである。

### 3 チャウの出現

#### 3.1 先行研究におけるチャウ

和歌山県方言に関する先行研究でアスペクト表現についての記述のあるもののうち、チャウという語形が明示されているのは、管見によれば次の3つしかない。

まず1つめは、林優子(1984)である。これは和歌山県内の18話者（紀ノ川沿いおよび主に沿岸部の18地点）に、8つの短い標準語のセリフを示し、話者が方言に訳したものである。話者の年齢等の詳細は不明だが、「土地在来の、老年層男性を主とした一般普通の言い方を報告」してもらったとのことである。8つのセリフのうち3つに計4つのテイルが含まれており<sup>7</sup>、18地点中3地点において、チャウが出現している。3地点の方言訳のアスペクト部分を抜き出したのが、次の表2である<sup>8</sup>。

表2 林(1984)の短文方言訳におけるチャウの出現

		地点8 海草郡野上町下佐々	地点9 有田郡広川町広	地点10 有田郡金屋町糸野
進行態	(雨がすごく) 降っているのに	フットンノニ	フッチャンノニ	フッチャルノニ
結果態	まだ起きているのか	オキトンノカ	オキチャンノケ	オキチャウンケ
	(土が)ぬれていると ころを(みると)	ヌレチャウトコ	ヌレチャウトコ	ヌレチャルトコ
	(昨夜)寝ている間に	ネチャウマニ	ネチャウマーニ	ネテルマニ

これをみると、地点8・9・10の結果態において、チャウが用いられることがあるといえる。

2つめは、江川克弘・井上博文(1994)の中に引用されている、江川克弘の1993年調査の結果である。江川の表を再構成したものが次の表3である。「知っている」にあたることばが調査されているが、動詞部分（「シッ」）は省略した。

表3 江川克弘の和歌山市調査(1993)の結果

中学生	高校生	30代	40代	50代	60代	70代
テル、テラ、トル、 トラ、チョル、 チャール、 チャウ	テル、テラ、 トル、 チャール、 チャーラ	テル、トル、 チャール	テル、テラ、 トル、 チャール	テル、テラ、 チャール	テル	テル、 テラ

表の通り、和歌山市の中学生・高校生・30代・40代・50代・60代・70代が調査され、その

うち中学生だけがチャウを回答している<sup>9</sup>。「知っている」をシツチャウというのである<sup>10</sup>。

3つめは、柏原卓(2007)である。和歌山県有田郡湯浅町の1922年生まれ的女性話者の談話資料(2006年7月14日録音)を分析したものである。談話中のアスペクト部分を拾ったのが次の表4である<sup>11</sup>。柏原卓(2007)も述べる通り、この話者は進行態・結果態ともにテ形列の語形を用いている。進行態のうちの1回がジャウ(チャウ)の形になっている。

表4 柏原卓(2007)の女性話者の談話中のアスペクト

進行態	タール ・タル	ヒタ ヌイ <u>ター</u> ンノネ (舌を <u>抜いている</u> のね) シタ ヌカ <u>レ</u> タル トコ アンノ (舌を <u>抜かれて</u> いる場面があるの)
	テル	ソンナ ヒ <u>テ</u> ル アイダニ (そう <u>している</u> 間に) オヨイ <u>デ</u> ル トコ アンノネ (泳い <u>で</u> いる場面があるのね) コノヨ <u>デ</u> イ <u>テ</u> ル (この世に <u>いる</u> )
	チャウ <sup>12</sup>	サケ ノン <u>ジャウ</u> サケヨー (お酒を飲ん <u>で</u> いるんだから)
進行・ 過去	チャール・ タール	ウニャウニャテ ユ <u>チャー</u> ッテン (ウニャウニャと <u>言っていた</u> の) ウニャウニャウニャテ ユ <u>ター</u> ッタン (ウニャウニャウニャと <u>言っていた</u> の)
結果態	テル	メー ツブ <u>ッテ</u> ルンヤケドモ (目をつぶ <u>っている</u> んだけど) ハリノ ヌア <u>ッテ</u> ル (針の刺さ <u>っている</u> 所に) セー アノ ノビ <u>テ</u> ルカラ (背がアノ <u>伸びて</u> いるから)
過去	テタ	ナオヒテ アゲ <u>テ</u> タケドネ (直して上 <u>げて</u> いたけどね) イッショニ イ <u>ッテ</u> タ (一緒に行 <u>って</u> た)

以上の3つの論文の事例から、少なくとも、1984年頃の海草郡から有田郡にかけての老年層男性<sup>13</sup>、および1993年当時の和歌山市の一部の中学生、および2006年当時の有田郡の80代女性、がそれぞれ標準語テイルにあたる方言としてチャウを用いていたことがわかる<sup>14</sup>。

### 3.2 聞き取り調査の結果

2014年2~3月に、和歌山県紀の川市の女性話者Y(1992年生)に聞き取り調査を行った。話者Yによれば、チャウを日常的に用いており、同世代の友人たちも同様の使用があるとのことである。たとえば次のような発話がありうるという<sup>15</sup>。

進行態：[雨が降っているのに「買い物に行け」と言われて断ろうとする時]

いま、雨フツチャウてよ。(いま、雨が降っているってば)

結果態：[友人の子供を見て]

今日はかわいい服キチャウな。(今日はかわいい服を着ているね)

ただし、話者Yはテイルにあたる方言語形として、チャウだけでなく、チャールも用いている。

例えば次の通りである。

進行態： 雨フツチャールんちゃん？ （雨が降っているんじゃない？）

結果態： あの人はめがねカケチャール。 （あの人はめがねをかけている）

また、話者 Y によると、チャウは若い女性も使うが、中高年男性も使うとのことで、次のような会話を近所で耳にしたという。

結果態： [和歌山県紀の川市の平池緑地公園でウォーキング中の 60 歳前後の男性同士の会話]

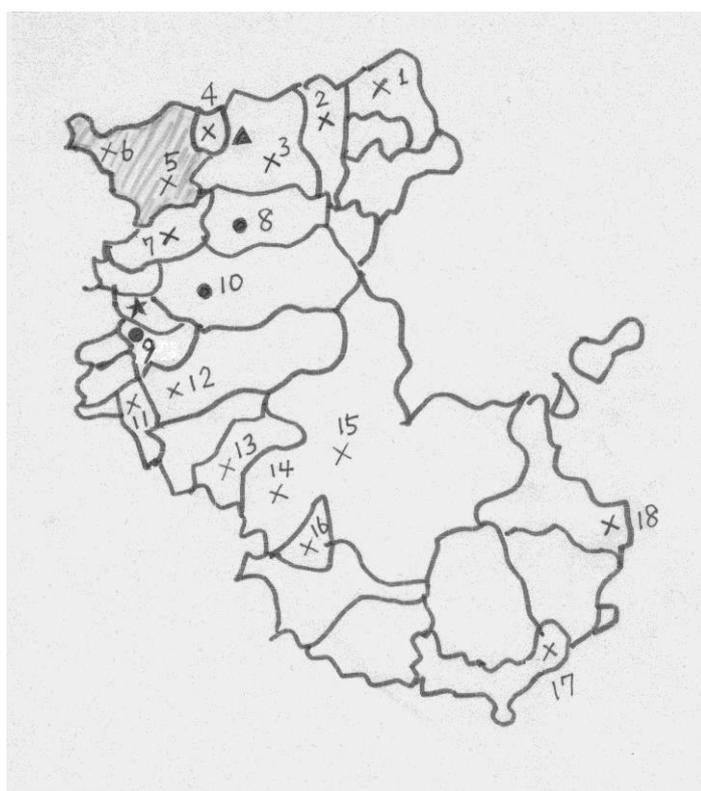
A おまえ、こんなところまで、なんでキチャウンよ。（お前こんな所まで何で来ているんだよ）

B 車でキチャウンやけどね。（車で来ているんだけどね）

### 3.3 チャウの出現状況

以上の、先行研究および聞き取り調査における「チャウ」の出現を合わせて地図に表した。<sup>16</sup>

図1 和歌山県におけるアスペクト表現「チャウ」の出現状況



●をつけたのは、林(1984)でチャウが現れた老年層の 3 地点、★は、柏原の 2006 年録音調査の老年層女性、北端の薄く塗りつぶしたところは和歌山市で、江川の 1993 年調査の中学生、▲は筆者調査 (2014) の若年層女性 (大学生)、の場所をそれぞれ表している。×印をつけたのは、林(1984)の調査でチャウの現れなかった 15 地点である<sup>17</sup>。

1993 年の中学生 (薄い塗りつぶし) と 2014 年の大学生の地点 (▲) 付近は、林(1984)では×

がある。このことから推測すると、1980年頃までは有田郡・海草郡（●と★）あたりの狭い範囲で使われていたチャウがその後北上し、1990年代以降に、それまでチャウが使われていなかった和歌山市（薄い塗りつぶし）・紀の川市（▲）近辺に広がっていったのではないだろうか。

#### 4 チャウはどのように生じたのか

##### 4.1 チャウと隣接関係にある語形

このチャウという語形は、後発のアスペクト表現だと思われるが、どのような過程を経て生じたのだろうか。まず (a) 地理的分布、(b) 年代的分布、(c) 話者の併用形、の3点から考える。

##### (a) 地域的な隣接関係

紀伊半島西側の大阪南部から東側の三重県まで海岸部 42 地点を調査している井上(1998)の調査結果の表には、イル・テイル・テル・オル・ヨル・トル・アル・ヤル・テアル・テヤル・タル・タール・チャル・チャールという多くの語形が現れている。

語頭にチャをもつ「チャル」「チャール」の2つの語形についてみると、和歌山市とその周辺にのみ、まとまった分布がある。具体的には、進行態のチャルは有田郡湯浅町と海南市の2地点、チャールは有田郡湯浅町・有田郡吉備町・海南市の3地点だけにあり、結果態のチャルとチャールはいずれも有田郡湯浅町・有田郡吉備町・海南市・大阪府泉南郡岬町・大阪府泉南郡阪南町・大阪府貝塚市の6地点にだけ存在する。

各地点における「チャル」「チャール」の割合をみると、進行態では、湯浅町と海南市の2地点で、14の動詞のほとんどでチャルもしくはチャールが回答されている（併用含む）。結果態では、有田郡湯浅町・有田郡吉備町・海南市・大阪府泉南郡岬町・大阪府泉南郡阪南町・大阪府貝塚市の6地点で、チャルもしくはチャールの回答が大半を占める（併用含む）。

チャルとチャールの関係をみると、進行態においては、チャルとチャールはほぼ同数であるが、結果態においてはチャールがチャルの2倍、出現している。

すなわち、前章で見たチャウの出現する和歌山県北部地域は、もともとはチャールもしくはチャルの分布する地域であり、結果態においてはチャールの方が優勢であった。

##### (b) 年代的な隣接関係

江川・井上(1994)の中の江川の和歌山市調査(1993年調査)の結果の表(日常のくだけた場面)をみると、「いる」はイテル・オル・イル・イチャール・イチャウ、「知っている」はシッテル・シッチャール・シッテラ・シットル・シッチョル・シッチャウなどが回答されている。このうち、チャウは中学生にしか見られないが、チャールは高校生・中学生から50代にかけて見られ、60代・70代には無い。チャウとチャールが年代的に隣接していることが示唆される。

なお、この江川の表にはチャルの形が無かったが(すなわちイチャル、シッチャルが無い)、それに先立つ江川・井上(1994)の記述(3名の和歌山市女性話者の発話)の中には、チャールお

よびチャルが現れていた。3名の使用語形を詳しくみると、明治41年生まれ女性はチャルとチャールを使っており、昭和16年生まれと昭和42年生まれの2名はチャルは使わず、チャールとチャーラを使っていた。この3名の発話データと合わせて考えても、和歌山市においては、チャルよりもチャールが若い世代に多く、この時点で中学生の使用していたチャウに近い語形であると解釈できそうである。

### (c) 話者内部における隣接関係（話者の併用形）

ここでは、チャウの使用者の併用形に注目してみる。

林(1984)の老年層話者のチャウ使用者は、表2に示したように、地点8ではトル、地点9ではチャル<sup>18</sup>、地点10ではチャル・テルを、それぞれ併用している。

柏原(2007)における老年層話者（1922生）の使用語形は、表4に示した通り、チャウ以外はチャール・タール・タル・テルであった。

江川・井上(1994)の中の江川の和歌山市調査（1993年調査）の中学生は、表3に示した通り、テル・トル・ Chol・チャールを併用しているが、最多の回答はテル、それに次ぐのがチャールであった。

筆者調査(2014)の対象者（紀の川市生え抜き大学生 Y）は、チャウとチャールを併用している。

限定的なデータからの推測ではあるが、1920年前後生まれの有田郡・海草郡あたりのチャウ使用者には、いくつかの併用パターンがあったが、1980～1990年前後生まれの和歌山市・紀の川市の話者は、チャールとの併用に絞られてきているのかもしれない。

以上の (a) (b) (c) と、語頭のチャ音の存在から、チャウと隣接関係にある語形は、チャールもしくはチャルであり、どちらかといえばチャールが可能性が高いのではないかと思われる。

## 4.2 チャウ発生の要因について

ここで、もしチャウがチャールから生じたとすれば、その過程と要因はどのようなものであったかについて考える。主な要因を2つ、想定できる。

まず1つ目は、活用形からの「類推」である。チャールの活用形には、ラ行子音が含まれないものがあり、談話においてはそれらが多く現れると推測されるのである。

過去形はチャーッタとなり、融合形としてチャーッテンもある。

- ・チゴチャーッタ（違っていた） …江川・井上(1994)より
- ・イチャーッタンヤ（今そこに行っていた） …岸江(1997)より
- ・雨降っチャーッタかして（雨が降っていたらしくて） …話者 Y による作例
- ・ユチャーッテン（言ってたんだよ） …柏原(2007)より

チャータの形もある。

- ・シンジャータ（死んでいた） …江川・井上(1994)より

チャールのルが撥音化して、ラ行子音が無くなる場合もある。

- ・オチチャーン (落ちている) …江川・井上(1994)より
- ・入院しチャーン (入院している) …江川・井上(1994)より

以上の例のように、実際の談話においては、ラ行子音を含まない活用形の出現頻度が高いため、終止形を～チャールではなく、～チャウと類推する場合が生じたのではないか。方言の活用形は、学校教育や文字言語によるインプットがほぼ無く、耳から自然に覚えるものであり、したがって、類推の生じる余地が大きいといえるだろう。

2つ目に考えられるのは、音声的な要因である。チャウは、語末拍からラ行子音の脱落が起きたものである。村内(1962)は和歌山県の方言の特徴として「[r]の脱落現象は著しい」と述べており、例としてバツカイ (ばっかり)、フマエル (ふまれる)、オキラエル (起きられる) を挙げている。湯浅(2007)にもツレラエテ (連れられて) が見られる。

ただし、和歌山県方言に関する諸文献における例文を探してみても、チャウの他には、語末拍のルがウに変化する現象の例は見られない。したがって、語末拍のル>ウの変化は、和歌山県における子音の発音傾向から系統的に起きた現象ではなく、チャール (もしくはチャル) >チャウに関して個別的に起きたものと見られる。

この形態変化の、補助的な要因が、2つ考えられる。

まずひとつは心理的要因で、ラ行子音を脱落させて母音拍で終わることにより、軽快な語感が生じ、好まれるということがあるのではないか。もうひとつは機能的要因である。すなわち、当地ではチャウに変化しても同音衝突が起きないということである。アスペクトのチャウは一見、テシマウの意味のチャウと混同しそうであるが (いずれも動詞のテ形を含んだ活用形なので同文脈に現れる)、当地のテシマウ/テシマッタに相当する語形はテマウ/テモタであるので、チャウとの同音衝突は起きないであろう<sup>19</sup>。

## 5 チャウの位置づけ

和歌山県北部で使われているアスペクトのチャウは、語末拍がウになるという点で、チャール (やチャル) に比べて、標準語形テイルとの近似の度合いが低い。標準語から遠ざかる方向への変化といえるだろう。変化の要因はおそらく言語内的なものと思われる。

チャウは、先行研究にはわずかしか見られなかった。その理由は、チャウはチャール (あるいはチャル) から生じたが、置き換えられたわけではなく、現在に至るまで併用形として存在しているため、調査結果として現れにくかったということであろう。

和歌山方言を含む関西方言全体の傾向としては、内包される多様性 (小地域ごとの変種の多さ) が徐々に減っていき、近畿内部で一様な性質を持つ関西共通語が形成されるという動きがあるようにもみえる。さらにそれは、関西出身の芸能人等が出演するTVの全国放送などを通じて、日本全国でも通じる (かもしれない) ことばにまでなりつつあるようにもみえる。しかしその一方で、関西方言の中の多様性はまだ健在である。伝統的語形が関西一円で力を持ち続け、残り続け

るといふ面もあるが、一方では、関西内部の比較的狭い地域社会における方言形が、使用地域がさほど大きくは広がらないままに、ある程度の生命力を保つという状況もありそうだ。地元志向の強い一定数の話者を中心に、そのような、比較的狭い地域における方言が保持されるという現象があるのだと思われる。今回扱ったチャウも、そのような存在なのではないだろうか。

## 6 おわりに

和歌山方言チャウの出現を聞き取り調査から確認し、その成り立ちについて、主として先行研究の調査結果を検討することによって考察した。

今回の考察をもとに、今後、和歌山県北部地域を中心として現地調査を行い、あるいは談話資料の聞き取りを行なって、推論を検証する必要があるだろう。また、ラ行子音の脱落については、アスペクト以外の形式を含めて広く見渡し、考えていく必要があるだろう。

---

1 第4集198図「散っている（進行態）」と199図「散っている（結果態）」における和歌山県内の語形をあげた。

2 「降っている（結果態）」「消えている（結果態2）」の2つのグロットグラムの回答をまとめた。

3 「来ている（進行態）」「開けている（進行態）」と「来ている（結果態）」「開けている（結果態）」の表をそれぞれまとめた。

4 この調査全体は、福井県の一部も含む近畿8県約600地点から結果を得ているとのことである。

5 調査時にチャウが出現しても、チャルが音声的にやや崩れただけの臨時的な変異であると考えられて、結果を表す際にチャルの記号をあてて処理された、という可能性もありうるが、たとえば『方言文法全国地図』の解説を読んだ限りでは、チャウをチャルと解釈して記号をあてたというような説明は無く、そもそもチャウについての言及が無かった。

6 井上文字氏に確認したところ、当時の和歌山県の調査において、チャウは聞かれなかったとのことである。

7 3つのセリフ（一～八のうちの二・三・四）の全文を次に示す。テイルに下線を付した。

二「こらおまえ！まだ起きているのか。早く寝よ。あした七時に起きねばならないのに。」

三「こんなに雨がすごく降っているのに、あいつらはどこらあたりへ出かけたのだろうか。日が暮れるよ。」

四「土がぬれているところをみると昨夜寝ている間に雨が降ったんだなあ。」

8 地名はその後、市町村合併により変更されているが、ここでは林(1984)にある地名を用いる。

9 江川は「くだけた場面」と「あらたまった場面」の2つの表を示しているが、チャウが現れるのは「くだけた場面」だけなので、ここではそちらのデータのみを再構成した。

10 江川の調査には「人がいる」についての結果もあり、「イチャウ（居ている）」の語形が中学生の回答にのみ、みられる。「知っている」の表とほぼ同様の結果なので（しかしハルなどが現れるため、より複雑である）、本稿では「知っている」で代表させておくことにする。

11 この談話の表記および標準語訳は、柏原(2007)の談話から引用した。下線は本稿筆者による。なお、表4にあげたのは、柏原(2007)の談話資料の中に現れたものだけである。柏原(2007)の分析部分には、「デチャールサケヨ（出てるからね）」「カエッタータンヤナ（帰っていたんだな）」があげてあるが、談話の中に見当たらないので、表4には入れなかった。文脈が不明であるが、柏原(2007)は「デチャールサケネ」「カエッタータンヤナ」のいずれも結果態に分類している。

- 12 テイル→チャウ、デイル→ジャウ、となる。すなわちマ・バ・ナ・ガ行五段動詞において～ジャウとなり、それ以外の動詞では～チャウとなる。
- 13 林優子(1984)には調査年の記載が無いが、ここでは仮に1984年調査と見なしておく。
- 14 チャウは、結果態か進行態かいずれか一方に限定されるということはないようである。
- 15 2014年2～3月に、和歌山県紀の川市生え抜き的女性話者Y(1992年生まれ、調査当時は大学4年生)を対象として、数回にわたり、面接聞き取り調査を行った。例文は、話者Yが内省し、状況を思い浮かべながら作ったものである。他にも文例は収集したが、最小限だけ載せた。
- 16 この図は、ウェブ上の無料地図を手書きでトレースした上に、手書きで印を書き込んで作った。
- 17 15地点名(林1984記載の旧地名のまま)は次の通り。1伊都郡都郡橋本市御幸辻、2伊都郡かつらぎ町笠田、3那賀郡粉河町川原、4那賀郡岩出町金池、5和歌山市貴志、6和歌山市加太、7海南市鳥居、11日高郡御坊市御坊、12日高郡川辺町小熊、13日高郡南部町山内、14西牟婁郡田辺市元町、15西牟婁郡田辺市三栖、16西牟婁郡上富田町橋杭、17東牟婁郡古座町田原、18東牟婁郡新宮市新宮(地点8・9・10は表2の中に記した通り、8海草郡野上町下佐々、9有田郡広川町広、10有田郡金屋町糸野)。
- 18 「フッチャンノニ(降っているのに)」と「オキチャンノケ(起きているのか)」はそれぞれ、フッチャル>フッチャン、オキチャル>オキチャン、であると考えられる。
- 19 「～ノトチャウ」(のではない)のチャウは当該地域にも存在するが、現れる文脈が異なる。

## 参考文献

- 井上文子(1998)『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』秋山書店
- 江川克弘・井上博文(1994)「和歌山市方言のアスペクト」『方言資料叢刊』4
- 大野仁美(1988)「串本方言の「イル」・「ヤル」・「タール」—その意味と機能—」『日本方言研究会第46回研究発表会発表原稿集』
- 柏原卓(2007)「湯浅の方言談話研究」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』57
- 岸江信介(1997)「和歌山県和歌山市和佐井之口方言の待遇表現」『方言資料叢刊』7
- 岸江信介・中井精一(1999)『大阪～和歌山間方言グロットグラム』摂河泉地域史研究会
- 岸江信介(2013)「紀伊半島沿岸におけるアスペクト表現の変異」岸江信介・太田有多子・中井精一・鳥谷善史編『都市と周縁のことば』和泉書院
- 国立国語研究所(1999)『方言文法全国地図』第4集(国立国語研究所サイトでも確認)
- 佐藤嘉奈(2009)「和歌山県東牟婁郡方言の動詞のアスペクト体系」『日本方言研究会第88回研究発表会発表原稿集』
- 徳川宗賢・真田信治(1986)「和歌山県紀ノ川流域の言語調査報告」『大阪大学日本学報』5
- 徳川宗賢・真田信治(1988)「和歌山県中部域の言語動態に関する調査報告」『大阪大学日本学報』7
- 林優子(1984)「八つの例文の各郡市別方言訳」『和歌山のことばと文学(村内英一教授退官記念論集)』(『和歌山のことばと文学』刊行会編集・刊行 代表者中西包夫)
- 村内英一(1962)「和歌山県方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 村内英一(1982)「和歌山県の方言」『講座方言学7 近畿地方の方言』国書刊行会

\*\*\*\*\*

【編集後記】

『現象と秩序』第2号をお届けします。創刊号より、執筆者数、論文数、頁数のすべてが増えています。どうぞご堪能下さい。

なお、本号掲載の大上梨奈論文は、発達障害中途診断者3名への長時間インタビュー記録を後半に含んでおり、公開が待ち望まれていたものです。これまでの大上氏の研究への言及は、(大上・榎田,2012)に言及対象を限られていましたが、これからは、この(大上, 2015)への言及も多くなるでしょう。

次号は、半年後、2015年10月発行を目指しています。慶應義塾大学の池谷のぞみ氏の神戸での講演記録等の掲載予定です。どうぞ続けてよろしくお願いします。

注記:『現象と秩序』第1号は、ヘッダーの柱に混乱があったため、2015年1月にWEB版のその部分を更新しました。(Y.K.)

\*\*\*\*\*

『現象と秩序』編集委員会 (2014年度)

編集委員

榎田美雄 (神戸市看護大学)

中塚朋子 (就実大学)

堀田裕子 (愛知学泉大学)

印刷協力

村中淑子 (桃山学院大学)

編集幹事

谷口晴絵 (神戸市外国語大学)

城野真衣 (神戸市外国語大学)

『現象と秩序』第2号

2015年 3月31日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 榎田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (ダイヤルイン)

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>